

『蟹あまの手振り』

善光寺で、まったく偶然に啓雲と出会ったミチは、無残に折れてしまいそうだった気持ちを辛うじて立て直すことが出来た。

仏に帰依したつもりなのに、情けない自分を叱るつもりで、力を込めた足取りを越後に向けた。

柏原の明願寺住職の紹介で新潟の俳人を訪ねるつもりだった。

訪ねた先、新潟の湊に近い竹庵の主は手広くお茶を商っていた。年恰好は五十前後と思われる。

総髪が黒々と若々しく、氣力に溢れた顔立ちだが物言いは柔らかだった。

明願寺住職の手紙を読み終えると

「そうですか、そうですか。さあさあ、碌なお構いも出来ませんが、こんな所で良ければ旅支度を解いていつまでもゆつくりして下さいよ」

相好を崩してそう言った顔は、まるで永い間離れていた我が娘に久し振りに会ったという風情だった。

俳諧に茶の湯と、勧められるままにゆるやかな数日が過ぎたある日の夕暮、遠く木を打ち鳴らす軽やかな音が耳に届いた。

良い調子の乾いた音に混じってガタガタゴトゴトという音も聞こえて来る。今までに聞いたことのない地鳴りのようなざわめきだった。

いつもは夕餉の膳と一緒に座る娘の姿が無い。不思議に思っていたところへ、少し遅れて主の徳左衛門が慌ただしく座った。

「今日から蟹の手振りと言いまして三日三晩の盆会の踊りが始まります。娘は待ちきれず先に夕飯を頂いて出掛けてしまいました。今日は店も早仕舞い。家内も先ほどからウキウキしていますのでミチさんも一緒に見物に参りましょう」
そう言った徳左衛門の顔も十分にウキウキとして見えた。どうやら聞きなれない音の正体は、盆踊りのざわめきらしかった。

「今夜は私も踊りますよ」そう言った徳左衛門の妻は、浴衣姿に編み笠を抱え小足駄と呼ばれる下駄を履いている。手振りの為に特別に作った丈夫な下駄なのだそうだ。

聞けば新潟の大方の者は、この日に履く下駄を普段履きと区別しているのだとか。

都は京都か新潟か、と言われるほど賑わう蟹の手振りは、踊り手も見物の衆をも極限まで熱狂させ、七月十五日までの三日三晩を踊り尽すのだ。

音の正体が判った。軽やかに調子を取っているのは、木樽をバチで打つ音だった。そして、遠い地鳴りに聞こえたのは、

小足駄で橋板を踏み鳴らす音だった。

土の上で下駄の音はそれほど響かない。信濃川に掛かる橋の上で、何十人も踊り手が樽を打つ音に合せ一斉に踊れば、足駄の音は川面にはね返って増幅され、大音響となって辺りに響いた。

誰一人として同じ振りで踊ってはいない。出鱈目にも見える手の振りようである。

その上、衣装も仮装もてんでまちまち。木樽を打ちながら甚句も幽かに聞こえるが、拍子に合わせて一斉に橋板を踏む音だけが際立って、町中の人達の魂をゆさぶっていた。

河岸に立って踊りを眺めているミチは、単調な旋律の繰り返しが心地よく、橋板を踏みしだく下駄の響きと相まって、すっかり手振りに夢中になった。

すぐに戻りませんが、と一度ミチの傍を離れた徳左衛門が、程なく湯呑みを提げて戻って来た。

「その先のお得意さんに挨拶に行きましたところ冷や水を頂戴しました。甘くて美味しいですよ」そう言いながらミチに湯呑みを差し出した。

提灯の明かりを頼りに湯呑みを覗くと、白玉の団子が二つ見える。ひとくち口にすると、薬としても用いられていた砂糖の甘さが珍しく、どきっとするくらい美味しかった。

思わず徳左衛門を見上げたミチの表情が余ほど可笑しかったのか、徳左衛門は声をたてて笑った。

「本当に美味しい。こんなに甘い冷や水を初めて飲みました」

湯呑みを徳左衛門に返してそう言う

「お客人だと言ったので余計に砂糖を入れたのでしょ」と徳左衛門は楽しそうに笑いながら答えた。

手振りは仲間に入れてもらいたいほど見ていて楽しい。冷や水は今までに味わったことの無い美味しさだった。

ミチはたった今の感動を即席の一句に詠んだ。

『見て居れば踊たふなる踊かな』

新潟の心躍る夜だった。